

ヨーロッパ・アフリカ間のナキドリの渡り

体験報告書



澤田 ちひろ

1. 研究者による夜のレクチャーやそこでの討議を含むプロジェクトで行った作業について

渡りを行う鳥は、200種50億羽（ヨーロッパ、アジア）にもなる。ただし、この地区における調査では、全ての種が見られるわけではない。

作業以外にも学会で発表する資料などを用いて、レクチャーを受けることができた。その中で興味深かったのは、渡り鳥の捕獲・調査の他に、渡り鳥の生態を周囲の自然環境や農業と関連づけて考えていたことだ。環境の変化は渡り鳥にも深刻な変化をもたらすことを知った。

2. 学校または授業および地域に還元できると思われる、プロジェクトで学んだ、または得た体験をどのように共有するか。

今回の体験で最も強く感じたことは、学生たちの研究に対する姿勢である。大学生はもちろんのこと、たくさんの中学生、高校生がプロジェクトに参加しており、積極的に作業を行っていた。参加している学生は、皆本当に勉強熱心で、「この研究が好きだ」ということが伝わってきた。将来は生物学を勉強して渡り鳥の研究をするのが夢だと語ってくれた学生もいた。このような状況は、日本においては考えにくい。研究は一部の大学生・研究者の物であるという認識が強い上に、このように門戸が開かれているわけでもない。まずは自分の学校・地域から、環境に関する授業内容を通し子どもたちに伝えていきたいと感じた。

方法としては、まず「総合的な学習の時間」の利用。そして学校内でのクラブ活動での取り組みである。（現在の科学クラブの活動で取り上げる。）また、以前ワークショップを行っていた地域の施設（子どもの国）でも、環境に親しむプロジェクトの手伝いができるのではないかと思う。

3. 体験が環境に対する考え方をどのように変えたか。

「環境教育」には以前から興味があったが、「渡り鳥」というのは全く初めての分野であった。渡り鳥の数が減少するという話題も、自分に関係のあることという受け止め方はしていなかったように思う。しかし今回の体験を通して、「高層ビルに渡り鳥が衝突し、大量死している」、「人間がえさを与えたために生態が変化し、渡りをしなくなった鳥がいる」などの事実を知った。

このことを受け、渡り鳥の調査だけにとどまらず、環境破壊など地球規模の問題提起もしていると感じた。

「環境に関する考え方」とは直接の関係はないが、今回の調査を通して、動物の神秘・すばらしさを身をもって感じる事ができた。例えばキタヤナギムシクイという種は、体重が 10g に満たないほどの体で、1 万キロ以上の道のりを渡るといふ。手のひらにすっぽり収まるほどのこんな小さな体で、想像を絶する厳しい道のりを旅すると思うと、言葉にできない感動を覚えた。

4. 探査現場の国および日本との保全に対する考え方の比較：例えば農業の方法、国立公園・自然地域の管理、資源の利用、廃棄物処理など。

今回、ハンガリーの自然保護区で調査を行い、その保護体制に興味を持った。近くに小さな町はあるものの、調査地の周りには平原が広がり、キャンプ地の前は広いトウモロコシ畑だった。日本における保護区は一種観光地化している箇所もあるように思えるが、今回の調査地は、出入りする車両にはステッカーが貼ってあり、見知らぬ人が訪れることはないように思う。

調査に訪れる人々が、皆互いにあいさつを交わし、家族のように暖かい雰囲気で行っていることも、この調査地を守ることに繋がっているという感想を持った。

廃棄物の処理については、日本ほど分別にうるさくない土地のようだ。ビン・缶類、燃えるゴミ、生ゴミの 3 種類にしか分けていなかった。調査地では生ゴミは土中に埋め、肥料として再利用していた。食品の入れ物は、ほとんどがプラスチックを使っているようだ。例えば、日本では紙製のパックに入っている牛乳が、ハンガリーではプラスチックの袋に入っていた。そのままでは使いづらく、ペットボトルに移して使用しているのを見て、紙類の利用を制限するための方法ではないかと感じた。

5. プロジェクトから得た自然環境に対する人類の影響とそのプロセス。

人間が生きていること自体が、全て自然界の生態に何らかの影響を与えているのだということを感じた。前述の通り、人がえさを与えたため渡りの必要性が無くなり渡りをやめてしまう鳥、経済の発達から都心部にできた高層ビルの明かりに引き寄せられた鳥は衝突して命を落とす、など様々な影響がある。ある都市では、ビルの所有者が死骸を片付けるために多くの人を雇っ

ているという。

例えば、今ここで使用している冷蔵庫のフロンが南極のオゾンホールを破壊し、今日乗った車の排気ガスがアマゾンに酸性雨を降らす。全てがこうやってつながっていくのだと思う。

6. アースウォッチでの体験が学校教育にどのような意味を持つか。

本からの知識だけでは得られない感動を自分の口から伝えられること、それを子どもたちは、「生きた知識」として聞くことができること。本物に触れる機会が与えられることが一番の収穫であったと思う。

今回、私が渡り鳥の調査を通じて環境についての興味関心を深めていったように、子どもたちにも追体験をさせたい。環境を知ることが、環境を守ることに繋がると信じている。そのような構想は今までは考えたこともなく、この取り組みが全国に広まっていけば、ハンガリーの調査地を見た学生の姿が、いつか日本でも見られるようになると思う。